

大輔はいつか直樹の存在を軽々と超えていくだろう、と佐伯は思った。胸倉を両手で掴んで激しく揺さぶられたような心の推移をつい最近感じたと思ったが、それは果たして大輔に対してだったのだろうか。何か大切なことを経験したような気がするが、思い出そうとすると、覚醒直前に見た夢のようにもどかしく消えていく。

忘れられなかった悲しい記憶を抱えて生きるのではなく、宝箱の中に大切に仕舞っておく方法もあるのだ、と笹野の顔を眺めながら佐伯は思うのだった。無理に蓋をしようとするから溢れ出してしまふ。思い出したければ幾らでも思い出せばいい。気の済むまで思い馳せればいい。判っているのは、ここにはもう彼らはいない、ということ。ただそれだけだ。肉体が存在しないだけで、魂が消えてなくなってしまったのか？

そうではない。思い出せばいつでも逢える。目を閉じれば、すぐそこに笑顔が見える。それだけでいいんだ。

「まーた哲学者になつてるし」

長い指先が伸びてきて、額をつんと押される。

佐伯は目の前の相棒とやらを見遣った。

大輔は生きている。生きて今、俺の目の前にいる。

大きな目を見開いて首を傾げる仕草をもう、直樹に似ていると思わなくなった自分がいた。

大輔は大輔なのだ。誰の代わりにもなり得ない。誰も大輔の代わりになれない。

「なんだよ？」

「何でもないよ」

「ハバネロ食わないの？」

気が付くと目の前に真っ赤な円形のが鎮座していた。見るからに辛そうなそれを佐伯は皿ごと押しやった。

「遠慮しとく……」

「そっか？　ひとくち食ってみれば？」

「いや、いい……」

笹野は一切れをくるくると丸めて口に入れ、目を白黒させながらグラスへ手を伸ばした。佐伯は吹き出した。  
「大丈夫かよ」

「これしき……ピザくらい制覇できなくてカズを何とかできるかよ」

「俺？」

佐伯が目を上げると、笹野は途端にどぎまぎし始めた。

「だから……相棒としてだよ」

くるくると目まぐるしく表情を変える。急に可笑しくなって、佐伯は笑い出した。

「何笑ってんだよ」

ハバネロの辛さに頬を真っ赤にしながら笹野は再び口を尖らせた。照れているのかもしれない。